

Title	會報
Author(s)	
Citation	天界 = The heavens (1933), 13(147): 284-284
Issue Date	1933-06-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/162373
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

フラジル支部便り

謹啓 日本はもう櫻の頃と存じます。當地はもう初秋の寒さがおぼへられはじめました。それでもバイネーラの蕾が半分くらみしましたから、日本の櫻の咲く頃には、やはり咲いてなつかしい故國をおもはせることで御座いませう。〔中略〕

流星、黄道光の観測用紙を御送り下さいまして有難う御座いました。大よこびで御座います。が何分百姓の方より観測の方が本業になつて居りますため、今後は好天気でもあるので、毎晩いたすことになりませうから相當多量の用紙がないと間に合ひません。それで只今サンパウロ市の方に印刷の問合せもいたして居りますが、相當高價なものになると存じます。高價でありまして出来れば何とかする積りで居ります。このアリアンサ村にある私達の新聞社は十八世紀時代の機械が一つあるだけで何んの間にも合ひません。旬刊をやつと發行する位です。何しろ田舎も田舎も私達入植以來滿七年になりますが、汽車を一度も見たことがないと云ふ情けない状態であります。その奥地の一移住地としましては私達の観測所は堂々たるものであります。但し内容はすこぶる貧弱であります。山本先生から時間は近くの放送局からでもとのお話も御座いましたが、サンパウロにあるのですが、設備がとても日本のやうに安く出来ません。サンパウロに住む日本人が日本を聴取する設備をしたのだそうですが、邦價貳千五百圓位について居ります。會員の方でラヂオに充分な御経験のおありの方が澤山居られることと存じます。日本を聴取し得る程度のセットの御設計を下されば好都合と存じます。來年度には是非設備したいと存じて居ります。先づは三月の報告に添へて。

1933年4月5日

南米支部 神 屋 信 一

會 報

○五月例会 去る五月廿一日午後三時より例により花山天文臺で例会講演會を開催、當日は生憎く雨天のため來集者は少なかつたが、小山理學士が「宇宙の大きさ」につき幻燈を使用しつゝ、二時間餘に涉つて、興味多い講話をされたのには、一同片唾を飲んで聴き、同氏の論理の整つた話の中に、暫しは宏大な宇宙の彼方へ天翔けて行つた心持ちであつた。

○七月八月の例会講演會 は休暇中につき中止致します。九月は山本會長の歸朝談が窺へる豫定です。

○來る八月一日より京都帝國大學(夏期)講演會が開かれます約一週間餘。

編輯後記——六月號の出来るのが後れ、漸く發送が濟むと直ぐ七月號の編輯である、編輯係は大馬力をかけてゐるが、仲々進捗しない。特に今度からは観測部の大宣傳とでも云ふ計畫なので、先づ太陽課號として出来上つたのがこの七月號、花山天文臺で日夜活躍してゐられる龜井氏の記事は、新會員にとつては勿論、現在観測部員にとつても、活きた大指針となることを請合つて、本號に大光彩を放つてゐる、多忙中同氏の御盡力に感謝して止まない、

柴田氏の紹介論文は天文學の將來の發達を暗示して居て興味深く、又珍しく大學教室の池田氏が、六月誌上熊谷氏の宇宙論の一端に大反駁論を放たれたのは注目に値する、福岡の坂元氏が憧れの常夏の國、日本領土の最南端への観測紀行文は廣く讀者の興味を惹く好讀物でもある事を信じて、同氏に深謝する次第、——蒸暑い梅雨が明けると晴天白日の盛夏、夜空の群星は我々を摩く、——汗だくでこの後記を書上げると直ちに次號は流星課の特輯である、讀者よ「天界」誌の活躍に御期待を請ふ